

第七話 子守学校



おれ、子守学校さ行ったんだよ。九つの時だ。

母ちゃん亡くなってから、二つになる野郎っこ（男の子）と四つになる野郎っこいたから、父ちゃんは稼ぎに行かなくてねえからや、おれが二人の弟の面倒みていたんだよ。

二人を連れて、クワゴ採りさ行くの。クワゴってのはな、桑の実のことで、盛りには真っ赤なのがいっぱい実るんだ。うまいんだよ。口のあたり真っ赤にして、そいつ採って食うのしや。

二人の弟にも食わせて、前掛けにもいっぱい入れてしや。

そんなことしてる時、学校の先生に会ってしや、

「おめえ、なんで、学校さ来ねんだ」

って言われたのしや。

「子守しねけねえんす」

って言ったつけれ、先生が、おれどこつくづく見てや、

「子守しねけねえんす、弟、負^おぶってでもいいから、こい」

って言われて、家さ帰って、父ちゃんにそれを言ったら、

「そんなら、行けばいいさ」

ってことになって、おれ、二つの野郎っこば負ぶって、学校さ行ったのしや。

四つの弟の方は父ちゃんが連れていったんだよ。

おれの家、山の方にあったから、山を下りていったら、他の生徒たちに会ったつけれ、

「あらあ、子どもば負ぶって学校にいくのかやあ。そんなら、子守学校さ行ったらいいちや」
って言われたんだ。

その頃はしや、子ども負ぶって学校さ来る子ども、結構いたんだよ。

そういう子ばっか、同じ学校の裁縫室に集められたんだよ。

そこで、子守しながら、時々、先生に字を習ったりなんかしてやあ、子ども、泣くと、部屋の隅に布団が敷いてあって、そこさ寝させていたんだ。

そこで聞いた先生の話、おもしろくてやあ、いまも忘れらんねえのしや。

こんな学校が、ちょっと前まで、そっちにもこっちにもあったんだね。

親たち助けて、子守しながら、学校さ行ったのしや。